

# 宮本武蔵

—— 映画文学人生論

原作：吉川英治 (1935-39年) 「朝日新聞」 参考：五輪書  
監督：内田吐夢 (1961年) 脚色：成澤昌茂 鈴木尚之  
出演：新免武蔵 萬屋錦之助 音楽：伊福部昭  
お通 入江若葉 撮影：坪井誠  
本位田又八 木村功 お杉 浪花千栄子  
朱実 丘さとみ 沢庵宗彰 三国連太郎

佛神は貴し、佛神をたのみず

剣聖宮本武蔵の話は子どもの頃から絵本や講談でなじんでいる。中学生のとき、吉川英治の小説も読んだ。沢庵和尚に導かれて、兵法の道をもとめて精進する求道者として、お通に惹かれながらも女色を避ける武蔵の物語だ。内田吐夢監督の映画は吉川英治の原作にほぼしたがつている。

関ヶ原の戦で落人になった武蔵は村に戻ってきたところを捕らえられて、千年杉に吊り下げられる。縄をきって逃がしてやったのがお通、姫路城天守閣の開かずの間に連れて行き、「ここを暗黒蔵として住むのも、光明蔵として暮らすのも、ただおぬしの心にある」と告げたのが沢庵。武蔵はその開かずの間で三年間、和漢の書を読み、心をみがいたという。

ところが、武蔵とお通や沢庵との縁は事実ではなく、フィクションだ。お通は恋人ではなく、沢庵は師ではない。武蔵が後世に残した『独行道』には「恋慕の情、思ひよる心なし」、『五輪書』には「我に師匠なし」と記されている。

お通はともかくとして、沢庵は実在の人物だ。但馬の生れで、大徳寺の高僧だった。漬物の沢庵の考案者という言い伝えもある。剣術に強いだけの野生児だった武蔵が書を読んで、剣の道を志して、遂に『五輪書』のような兵法書を書けるようになったのは沢庵の影響と思いついていたが、どうやら吉川英治にだまされていたらしい。



## 宮本武蔵

映画文学人生論

それはともかく、吉川英治の『宮本武蔵』は累計で一億二千万部以上売れた日本文学史上最大のベストセラーだ。欠点をあれこれ指摘することはたやすいが、現実に多数の日本人の読者に愛読されている。その理由は何だろうと思いつながら内田吐夢監督の映画を観て、吉川の原作を読み直し、さらに『五輪書』や『独行道』にも目を通した。

『五輪書』には二十九歳までに六十余回の勝負を行い、すべてに勝利したとあるが、その後は勝負をしていない。吉川英治の小説も佐々木小次郎との巖流島の決闘で終わっているが、その後、六十二歳で『五輪書』を完成した七日後に死ぬまでは何をしていったのか。

「ある所をしりて、なき所をしる。是即空也」  
「空を道とし、道を空と見る所也。空有善無悪」と二十九歳で悟ったのだろうか。

『独行道』二十一ヶ条は高弟寺尾孫之丞に残した生き方の指針である。なかでも有名なのは「我事において後悔せず」だが、これはムリというもの。「一生の間、欲心思はず」「身ひとつに美食を好まず」「善悪に他をねたむ心なし」——とてもついでいけそうもない。

凡人は意志の弱い本位田又八のように風の吹くままにふらふらと生きるしかないが、せめて「佛神は貴し、佛神をたのみず」を私も心がけたい。

沢庵を漬物にして寒施行